



Mermaid
Good-bye



文風 冴月

Mermaid Good-bye

人恋しい森の奥で
湖のほとりに腰掛けた
人魚の微笑み

人魚の涙は遠ざかる
人魚の涙は遠ざかる

聴こえた気がしたあの日の合図
奇天烈な傘を差した集団が
黒衣の裾を泥で汚す

雫を舐める唇
周章てて綻ぶ蕾と

人魚の涙は、遠ざかる

一丁の殺意が通り抜けた先
世界の暮れ
降りしきる

時雨に掻き消された咽喉の答えは
未だに僕の
胸に杭を刺す

人魚の涙は、遠ざかった
そして、

Mermaid Good-bye _the rust city_

人魚が絶滅したと聞いたその日、私は大学での講義を終え、帰り道にふらっと立ちよった公園で読書をしていた。雲行きが怪しいな、と思って空を見上げていると、すぐそばの狭い道を、車体をごとごと言わせながらスピーカー（注：報道車のこと）が走ってきた。「人魚は絶えた！ 人魚はもういない！」などと寂れた電子音が木々を揺らした。風に遊ばれながらゆっくり落ちてきた木の葉を栗として本に挟み、腰を上げた。軋むベンチに別れを告げ、スピーカーの通り過ぎた道へ出る。

暗がりから現れた襤褸を纏った老婆は、折れ曲がった腰に力を入れ、勝ち誇った顔で「お前さん、聞いたかい。人魚が死んだってよ。人魚が、死んだってよ！」。顔を皺くちやにして笑う老婆に会釈をして、その場を去る。

木枯らしが吹いた。寒い。

私は人魚を見たことがなかった。いつか、見たいとも思っていた。そんな頭のおかしいことを考えるのも、世界中で私くらいのもんだろう。

少し歩くと商店街に出る。人が集まり、大騒ぎになっている。義足主義者の男が、葉巻を吸っている。隣では太ったアイスクリーム売りが、寒そうに凍えている。多くの歓声が上がり、人々は人魚の絶滅を祝福していた。

人魚は上半身が人間で下半身が魚という奇妙な生物だ。私が生まれた時にはすでにテレビジョンでは規制がかかっており、人魚に関する書物は燃やされたあとだったので、人魚についてはその程度の知識しかない。遠くにスピーカーの声があった。「人魚は絶えた！ 人魚はもういない！ 人魚はもう、いない！」

雨が降ってきたので途轍もなく長い坂を下り、自宅へと戻る。玄関を開けるとそこには人魚がいた。「お助けください。お助けください」

人魚は金色に輝く稲穂のような髪をした若い女だった。想像よりもずっと美しい。すっと通った作り物のような顔。晴れた日の大海原を思わせる青い瞳。そして、何より目を引くのが、魚の尻尾が伸びる、下半身だ。「お助けください」

水面に反射する太陽の光の如く、人魚の尻尾はきらきらと輝いている。

「人魚ですか」

「お助けください」

「大丈夫です、私は貴女の敵ではありませんから」

「お助けください。お助けください」

人魚は壊れてしまったラジオのように同じ言葉を吐き続ける。

「まあ、良いです。ちょっと失礼」

靴を脱ぎ、私は玄関に上がる。びくっと人魚の身体が震えたが、それだけだった。彼女の身体を跨ぎ越す。「貴女の味方は全て死んでしまったのですか」私は尋ねる。

彼女の同胞はきっと滅ぼされてしまったのだ。人魚との長い戦争が終わった。そしてそれは人間の勝利で幕を下ろしたのだから。

「全て、殺されました」

か細い声だった。海の底を流れる海流のような強さは、そこにはない。窓から差し込む夕日に、遥か彼方を走るスピーカーの音が混じる。人魚は死んだ、とそう言っている。

「最後の砲撃が止んで、固く閉じていた両目を開けたら、私はここにいたのです」

ここ、と彼女が落とした視線の先に、私の脱いだ靴が置かれた玄関がある。人魚の生き残りが、今ここに存在している。長年見たいと思っていた人魚を目の当たりにしても、それほどの感慨の沸かない私だったが、彼女の境遇には同情する気持ちがあった。

「もう誰もいなくなってしまうました。どうか、助けてください」

人魚には海を操る力がある。本当に人間を滅ぼすことのできる唯一の種。

泡が溶けるみたいな不安に彩られた彼女の瞳。

「助けられるか、解らないけれど、好きなだけここにいたら良い」

私はそう言って人魚のひんやりとした手を握る。スピーカーの声が遥か彼方で、小さくなって、やがて消えた。

Mechanical Butterfly

歯車の音を軋ませて、羽ばたく
微細な風が円を描いてゆく
季節

改造された森の奥で
燃料切れ寸前に踊る、群れ
遠くの遺跡に嵐が舞い起こる
彼方

銀色の螺旋
鍵穴を見つけ出して、蜜を吸う

Mechanical Butterfly _fly away_

飛んでいたのは機械仕掛けの蝶々だった。ひらひらと煙がたなびくみたいに宙を舞う。その行き先を知っているものは、幼い時に階段から落ちるなどして病院で横たわっていたのだが、夕暮れがやってくると同時に行ったことのない懐かしい街を思い出して、絵画の中に長く伸びる地平線に自分の人差し指を重ねることによってあたかも共同体としての自覚を再認識しようとしているかのようだった。

虹のかかる火星付近に針の落とし物があるからと言って、聴いたことのあるメロディを奏でる置時計を担いで向かう。その折に見かけたのだ。

機械仕掛けの、蝶。

鋼色の身体は少しだけ錆びついていて、とある街の夕景にとってもよく似ている。不透明なアルゴンに満ちたあの街のブランコのことを思い出すと、胸が詰まる思いで。

それでも私は眼前を行く蝶を追って、森の中へと探し物を見つけるべく分け入っていく。

何が見つかるのか。

何か見つかるのか。

草木に覆われた地面に広がった大きな水たまりの表面で、羽休めするメカニカル・バタフライを足の先で突いて、私は明後日の未来を夢想する。

棺の中で眠る歌がいた
誰からも忘れ去られたその歌は
暗く閉じた闇の中で
息を凝らして
泣いている

棺の中で笑う歌がいた
誰からも忘れ去られたその歌は
少しの希望を鞆に入れて
喉を鳴らして
泣いている

棺の中で叫ぶ歌がいた
誰からも忘れ去られたその歌は
此処ではない何処かを目指し
声を嗶らして
泣いている

棺の中で滅ぶ歌がいた
誰も知らないその歌は
誰も知らないその声で
世界の果てを
呪っている

your pain

あなたのために、うつったせかい
あなたのために、にごったせかい

そう唄って幾年が経ち
僕らは見えない手で歩かされた

落とした針が壊れてしまった
粉々に割れてしまった
響く風の色だけを聴いて
ひどく安心したのは
あなたのため

故郷のない兵士が着ぐるみを着て歩いている
背中に刻まれた蝶々は
一息だけ毒を撒くと
薄明かりの空へ踊るように笑った

love letter

名目。黄昏。放課後のチャイム。鴉。傾いた秒針。ドアノブ。消毒用アルコール。階段。埃のついた傘。渡しそびれた歌。指揮棒。崩れかけの鎖骨。散歩道。回遊。曇り空。庇。靴の音。鞆。喉元。フルートに見えた影。ブランコ。逆回しの螺子。歪な棘。周回。飴細工。薄闇。曲がり角。攀じ登る塀。指についた砂。煙突。風景。削り落とすカナリア。紅。想像。紫蝶々の食べかす。千枚通し。四角。坂道。回転。スポーク。折れ曲がる石段。畦道。雲に似た蛙。三月。背中。黒い髪先。リップクリーム。陽炎。雪が舞う街灯。橙。世界。あなた。一人きりの夜風。内緒話。糸電話。蝙蝠。花火細工の海月。紅葉。偏微分。石楠花。墓石を磨く人。薬缶。林の奥から見ている虎。水溜り。三面鏡を覗いた日。攪拌。心のブリキ。陶磁。董嫌いの石ころ。包み紙。鈍色。掃き掃除。一周。テレホンカード。両手に抱いた花束。郵送。切手。恋文。バックスペース。恋。

the chairs

椅子が二脚並んでいる
街灯はそれを見ている
誰が座ることになるのか、門番と相談しながら

宵闇が片方の椅子に座る
もう片方には空虚が座る
大きな鎌を持った死神が、椅子取りゲームの敗者

椅子が一脚鎮座している
囚人が座ろうとした
聖人が座ろうとした
愚者が座ろうとした
賢者が座ろうとした
狂人が座ろうとした
誰も座れなかった
椅子がただただ在る風景は続く

White Tale

A1923-0901の世界からD2011-0311の世界へ

御伽噺は終わりを告げましたか

まだ淡い夢を降らせていますか

傘をさす腕が疲れていますか

漆黒のうねりに胸を焼かれていますか

引き裂かれた蝶々は今も笑っていますか

家畜小屋の惨劇を貴方は知っていますか

A1923-0901の世界からD2011-0311の世界へ

御伽噺の続きが始まりましたか

終わりを見つめられましたか

驕りを見据えられましたか

死を見つけられましたか

そうですか

氷点下三度の吐息が
輝きを帯びて氷柱を眺めている

白々しい燐粉は白雪にしか見えず
羽ばたきを終えた一団が還る先は母の膝

遥かから聴こえるその音は
何光年もの虚無を泳いで
瞼の奥に一枚の絵を描いた

錯視、策士
僅かな隙間を埋めるように
そっと、そっと
瞬いては消える純粹が
宇宙の誕生を恨んでいる

fall

夕暮れの草原。橙色に染まる風の中、よじれたレールが一匹の案山子に絡み付いている。鴉のいない寒空に、煙を垂らしたような雲が伸びている。黒々とした冷えたレールは、無感動に天高く案山子を締め上げて、北の空に輝く星を眺めている。

fall-(a)

路地裏の掃除をしていると古びた新聞紙の上に妖精が乗っかっている。拳ほどの大きさの妖精だ。くるっとしたブロンドの髪に、緑色の身体。背中には昆虫の羽根のようなマントが生えている。

手にした竹箒がひどく重く感じるようになれば、掃除はやめて良い。お腹のところで手についた汚れを拭い、空を見上げる。風が吹いて、もうすぐ雨が降るのを知らせる。

大型のエリマキトカゲが闊歩している。煙草を吸っているのか、口からは一筋の紫煙が伸びる。赤外線にやられた背中には、誰も見たことのない模様が広がっている。

赤茶けた地面に一本の草が生えている。それはこちらを見て、ぺこりとお辞儀をする。咳払いを一つしてその横を通り過ぎる。

星を集めていた犬たちが帰ってきた。どれも晴れやかな表情で、手にしたイソギンチャクを愛でている。

立ち上る紫色の雲を飴玉にして舐める発掘家が、渋い顔でこちらを見ている。早く家に帰らなければ。

雲の切れ間から漏れた光を辿っていくと、そこには壊れた置時計があった。大きな振り子も今は時を刻むのをやめてしまっている。

周りにうずたかく積み上げられたゴミたちに寄り掛かるようにして置時計は眠っている。

そばを通ったふてくされたトカゲが、

「あんた、それ、もっていくのかい」

埃にまみれてはいるが、濡らした布でもって手入れしてやれば綺麗になるだろう。私の部屋に置くのも悪くはない。ちよろちよろと動き回るトカゲを踏まないようにして、私は置時計を担いで歩き出す。

一歩を踏み出すたびに、ごとごとと時計の振り子は揺れる。まるで忘れていた仕事を思い出したかのように。右に、左に、振れる。

あと数分で家に着くといったところで、急に疲れがやってきた。空は今にも落ちてきそうなくらいに灰色の雲に覆われている。

目の前を通り過ぎた親子は黒い傘をさしている。なんとも不思議な、絵に描いたような傘だ。黒い煙が傘の形を取ったかのような。

うんしょ、と気合を入れて歩き出す。置時計はやっぱりごとごとと振り子を鳴らしている。時を刻んでいる。私と置時計が歩く時間を計測している。

海岸線の言い訳を黒電話が騒ぎ立てる
白波の行方を分度器の先で摘む
虐げられた電波塔の根本に三回生の向日葵
思想剥奪の葉を雲の間に挟めば、明日の月が昇らなくなる
凍結しない触先を抱えて啄ばむ様に五月雨を蒸す

Black Candy

甘い甘い暗がりに舞い降りた
静かに

ころころ転がる、流転する
確かに

軋み始めた現実世界の砦を破壊するのは
そう、ただひとつの慈しみ

暗がりに彷徨う天使
まじないをかけたアンブレラ
濡れそぼった街に、いつか聴いた歌が
ひっそりと木霊する
雨が、降る

Black Candy Umbrella Rhapsody

「黒い傘が見えるのです」

吐き出された言葉は色褪せた写真のように、ぎこちなく空気を揺らした。窓硝子に当たる軽い音に、ああ、雨が降ってきたな、と場違いに私は思った。

「傘、ですか」

「はい。黒い、傘なのです」

男は黒い傘の描写を始める。

「まるで稚児が気まぐれに塗ったような、粗末な絵のようなのです。ちょうど人の手のひらの辺りから柄が出て、頭の上で黒い花を咲かすみたいに、傘が開いているのです」

それは本当に傘を持っているのと変わらずに見えることだろう。だが、私にはそのようなものは見えない。

「今も、その、傘は見えるのですか」

「いいえ。じっと見つめっているとふわっと煙を散らすように消えるのです。ぐるぐると円をひたすら引いていたら描けるような拙い傘の絵ですが、私にはどうもそれが見えるのです」

男は身体の不調を訴え、私の元までやってきた。彼は人には見えないものが見えるようになってしまった。それは黒い傘。聞けばそれはまるで絵に描いたような代物らしい。しかもその画力は著しく低いそうだ。たまたま形状が傘に似ているだけなのかも知れない。

「如何したら、良いのでしょうか。道を歩いているだけで、そんな傘が見えてしまうものですから、気が気じゃなくて」

「害はないのでしょうか」

「それは、そうですが。薄気味が悪くて。みんなして同じような、黒い傘を持っているように見えるのですよ」

「ふむ」

気の病だ。精神安定剤と睡眠薬を処方するしかないようだ。

「不安なのです。私が見ている世界とは何なのか。今見ている、現実だ、と思い込んでいる世界も、実はあの黒い傘みたいに偽りで、いつかふわっと空気に溶けるように消えてしまうのではないかと、不安なのです」

「安心してください。私は偽りではない。ここに存在しているでしょう」

それは彼を安心させたかも知れないが、でまかせに過ぎないような気がしてくる。私は黒い傘を見たことはないけれど、でも、今こうして見ている世界が真実なのだとは証明することはできない。だとすれば、彼との違いは黒い傘を見たかどうかだけなのだ。果たして黒い傘を見て、自己に不安を抱き、世界に疑問を呈する者が不幸なのか。それとも、何も知らずに平穏に過ごしていく者が不幸なのか。それは私には解らないことだ。

薬を受け取った男は大事そうに小包を両手で抱え込んで席を立つ。ドアを開け、夕闇の迫る街へと足を踏み出す。通りにはいくらかの人間が歩いている。男が歩き出す。その背中を見送っていたが、まるで雨水に溶けるインクのように、夕暮れの橙の中へと消えた。

紅茶が冷めた頃に彼女はひっそり涙する

人類に忘れ去られた自動人形が、驚くほど滑らかに紅茶を運んでくる。音も立てずに置かれたカップからは、不規則な湯気が立ち上る。飲む相手は何処にもいない。惑星の上で動いている者は、この自動人形だけだった。

紅茶を運ぶことが彼女のレゾンデートル。カラコロンとドアのベルが鳴るのを、今日も彼女は心待ちにしている。

外には雨が降り続けている。